九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

萩市見島のアクセント

二階堂，整
九州大学大学院（修士課程）

https://doi.org/10.15017/11987

出版情報：語文研究. 61, pp.54-61, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

萩市見島のアクセント

二階堂　整

はじめに

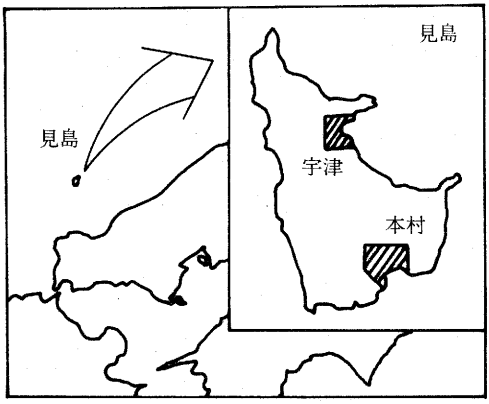
見島は山口県萩市の沖合いに浮かぶ孤島である。一般に山口県全域が東京式アクセント[1]の体系であるのに対し、この見島のみが特異なアクセント体系を有している。[2]しかも、そのアクセントは、現在、大きくゆれており、複雑な様相を呈している。

本稿は、島内で最も古態を残す[2a]とされる宇津集落を対象とし、従来の報告で取り上げられることの多かった二拍名詞アクセントの体系の解釈を試みようとしたものである。

一、見島の概観と調査方法

見島[3]は萩市の北西、約44㎞の海上に位置する。面積約7.9㎢、人口約2000人、一日二便の定期船が島と萩市を結ぶ。

島には本村と宇津の二集落があり、本村は農業中心の「在」と漁業中心の「浦」に分かれ、宇津は半農半漁の形態をとる。宇津は近世初期、本村より分離してできた枝村で、本村とは山一つ隔てており、昔は北前船の寄港地として栄えた所でもある。三地区間の生活の交流は少なく、通婚も稀であったという。



次に調査方法について説明しておく。調査に取り上げた語彙は二拍名詞322語（一類101語・二類39語・三類99語・四類49語・五類34語）[4]である。語彙の選択にあたっては、その多くを古字書等のアクセント文献やアクセントを反映した資料[5]によって、歴史的なアクセントの姿を確認できる

ような語に求めた。語類の決定にあたっては前述の資料を重視し、現代の各地の方言アクセント[6]も参考にした。調査は筆者自身が被調査者に直接お会いして、準備した調査語彙カードを丁寧に読んでいただくという臨地の「読む調査法」をとった。被調査者には言語形成期を見島で過し、その後、島外の居住歴があっても、それが三年をこえることのない、いわゆる「生え抜き」の方々を選ぶように努めた。今回の報告は昭和58年7、9月、昭和60年7月に行った調査によるものである。

二、見島のアクセントの姿

見島のアクセントは、現在、変化の渦中にあるようである。そこで被調査者の中でもより古い型をとどめていると考えられる老年層三名（男性63歳、女性2名61歳）と、比較のための若年層3名（男性16歳、女性16歳、15歳）を選び、資料とした。第一表はそのアクセントの型の分布をまとめたものである。アクセントは3名中2名以上、共通に発音されている型に従って分類し、3名とも型が異なる場合は「不定」として扱った。

表より見島の二拍名詞アクセントには三つの型（○●▼、○●▽、●○▽）[7]があることがみてとれる。そして老年層では各語類ごとに型が大きくゆれており、それに比べると、若年層は語類と型の対応がよくなるように思われる。

本来、アクセントの型は、その性格からいえば、歴史的にも方言的にも語類とおおむね対応すると思われる。ところが、見島の場合、その対応が甚だしく崩れ、語類が、割れて、違う型に分属した状態にある。

第一表

型／類	老年層 ○●▼	老年層 ○●▽	老年層 ●○▽	老年層 不定	若年層 ○●▼	若年層 ○●▽	若年層 ●○▽	若年層 不定
一類	36 35.6	57 56.4	7 6.9	1 0.1	53 52.3	42 41.6	6 6.1	0 0
二類	2 5.1	27 69.2	9 23.1	1 2.6	6 15.4	25 64.1	8 20.5	0 0
三類	4 4.0	54 54.5	39 39.4	2 2.1	2 2.0	84 84.8	12 12.1	1 1.1
四類	21 42.9	6 12.2	21 42.9	1 2.0	9 18.4	3 6.1	36 73.5	1 2.0
五類	8 23.5	2 5.9	24 70.6	0 0	0 0	2 5.9	32 94.1	0 0

（上段の数字は語数、下段は%である）

これは、かつて、同じ型に属していたものが分裂していったことが考えられ、本来の型を推定する必要があると思われる。

このことについて従来の説では、以下のように考えられている。見島のアクセントに関して、これまでに岡野氏[(2)a]、曽野氏[(2)b]、添田氏[(2)c]、三氏の報告がなされている。二拍名詞アクセントについては、その

本来の体系を、岡野氏、曽野氏は、

一類	二・三類	四・五類
○●▽	●○▽	○●▼

に、添田氏は、

一・二類	三類	四・五類
○●▽	●○▽	○●▼

に推定されている。

第二表

	一類	二類	三類	四類	五類
○●▼	○			○	○
○●▽	○	○	○		
●○▽		○	○	○	○

三氏の資料をみると、筆者同様、語類が大きく二つの型に分属した状態にある。これを簡単にまとめたものが第二表で、丸印がゆれている型を示している。資料は三氏とも老年層の二拍名詞アクセントのもので、岡野氏は宇津集落のもの、曽野氏、添田氏は本村「在」のものをもとにしてまとめたものである。

表のように見島のアクセントは一定していない状態にあるが、大ざっぱにいって、○●▽を持つ一〜三類のグループと、それ以外の四、五類のグループの二つに分けられるようである。

一〜三類では、二類の扱いに三氏で違いがみられるが、四、五類は三氏とも本来の型を○●▼とみておられる。ただし、三氏の資料に共通してみられる特徴として、四類に比べると五類に●○▽の占める割合が高いということがあげられる。これは筆者の資料でも同様であり、四類と五類に何らかの差を認めるべきものであるかどうか、疑問の残る所である（後述）。

このように見島の、特に老年層の場合、語類としてのまとまりが崩れ、分属の傾向が著しく、調査者によって、同じ結果が得られるとはいえない状態にある。そのため、分属している語がどの型に多いかといった、単純な数量的比較によって、本来の所属していた型を判断するのは危険なように思われる。

そこで、型と語類の対応が比較的安定している若年層に目をむけ、むしろ、ここから本来の型をさぐる手がかりをつかむことはできないだろうかと考えてみた。

三、若年層からみたアクセント

第三表は、老年層と若年層の型と語類の対応を具体的語彙をあげて示したものである。さらに各語彙が老年層と若年層でどの型に対応しているかを示すために、○●▼に所属する語を老年層でA群、若年層のそれをa群、○●▽に属する語を老年層でB群、若年層のそれをb群、●○▽に属する語を同様にC群とc群に、不定は両方？群とし、若年層の語の右下に老年層での所属群を記号で表記した。

第三表

老年層

A群〔一類〕味 飴 椅子 梅 海老 甥 叔母 雉 君 桐 霧 国

（○●▼）笹 鮫 品 杉 鷹 虎 西 灰 蝿 幅 笛 薪 的

〔二類〕桃 森 槍 嫁 岡 黴 茅 塵 姉 友 藤

〔三類〕蟬 型

〔三類〕斧 肉 脇 頬

〔四類〕板瓜錐芝杖箸跡糸稲海帯笠
肩筋隅外苗中喉松味噌
〔五類〕雨声足袋露鶴鍋前窓

B群〔一類〕磯魚牛枝駕籠金釘口鍬桁先里
（○●▽）鯖皿皺裾底袖竹烏庭箱鼻羽髭
膝紐蓋札筆星道峯虫鳥賊顔風鐘
壁釜道腰是酒鋤其滝棚壺何処軒
端暇右水溝誰
〔二類〕岩歌内音紙川鞍鹿旅次寺夏
橋旗肘昼冬町皆胸村雪北虹沼
人垣
〔三類〕家池犬腕馬裏親髪鴨菊岸草
櫛靴熊倉怪我事米竿匙舌島霜鮨
炭咳谷月唾時毒泥波縄糠熱墓
花腹縁孫豆店山指弓夢綿堀亀
蛸萩鳩
〔四類〕臼鑿母下駄他父
〔五類〕牡蠣嘘

C群〔一類〕姉蟹蟻鈴傷爪蜂
（●○▽）〔二類〕雲丹門彼牙杭妻梨石殻
〔三類〕海女貝神雲恋鯛鞭垢足穴網
泡芋色鬼鍵皮肝茎栗桑苔坂錆
塩縞脛墨綱年蚤糊海苔鉢浜骨耳
飯毬

〔四類〕息今数絹杵管汁側蕎麦此処独
楽鞘
〔五類〕青秋朝汗兄鮎井戸桶影黒鯉琴
鮭猿白生葱春鮒蛇眉婿夜蜘蛛

?群〔一類〕駒
（不定）〔二類〕笊
〔三類〕玉土
〔四類〕鎌

若年層

a群〔一類〕味$_A$飴$_A$椅子$_A$梅$_A$海老$_A$甥$_A$叔母$_A$雉$_A$君$_A$桐$_A$霧$_A$国$_A$
（○●▼）笹$_A$鮫$_A$品$_A$杉$_A$鷹$_A$友$_A$西$_A$灰$_A$蝿$_A$幅$_A$笛$_A$薪$_A$的$_A$桃$_A$森$_A$槍$_A$嫁$_A$烏賊$_B$顔$_B$風$_B$鐘$_B$壁$_B$釜$_B$首$_B$腰$_B$是$_B$酒$_B$鋤$_B$其$_B$滝$_B$棚$_B$壺$_B$何処$_B$軒$_B$端$_B$暇$_B$右$_B$水$_B$溝$_B$蟻$_C$鈴$_C$
〔二類〕蟬$_A$北$_B$虹$_B$沼$_B$人$_B$笊$_?$
〔三類〕斧$_A$堀$_B$
〔四類〕板$_A$瓜$_A$錐$_A$芝$_A$杖$_A$箸$_A$下駄$_B$他$_B$此処$_C$

b群〔一類〕鯖$_B$皿$_B$皺$_B$裾$_B$底$_B$袖$_B$竹$_B$島$_B$庭$_B$箱$_B$鼻$_B$羽$_B$髭$_B$膝$_B$紐$_B$蓋$_B$札$_B$筆$_B$星$_B$道$_B$峯$_B$虫$_B$傷$_C$爪$_C$蜂$_C$岡$_A$
（○●▽）磯$_B$魚$_B$牛$_B$枝$_B$駕籠$_B$金$_B$釘$_B$口$_B$鍬$_B$桁$_B$先$_B$里$_B$
〔二類〕岩$_B$歌$_B$内$_B$音$_B$紙$_B$川$_B$鞍$_B$鹿$_B$旅$_B$次$_B$寺$_B$夏$_B$橋$_B$旗$_B$肘$_B$昼$_B$冬$_B$町$_B$皆$_B$胸$_B$村$_B$雪$_B$石$_C$殻$_C$型$_A$
徽$_A$茅$_A$塵$_A$駒$_?$

〔二類〕家B 池B 犬B 腕B 馬B 裏B 親B 髪B 鴨B 菊B 岸B 草B

櫛B 靴B 熊B 谷B 倉B 怪我B 事B 米B 竿B 匙B 舌B 島B 霜B 鮨B

炭B 咳B 谷B 月B 唾B 時B 毒B 泥B 波B 縄B 糠B 熱B 墓B

花B 腹B 縁B 孫B 豆B 店B 山B 指B 弓B 夢B 綿B 垢C 足C

穴C 網C 泡C 芋C 色C 鬼C 鍵C 皮C 肝C 茎C 栗C 桑C 苔C

坂C 錆C 塩C 縞C 脛C 墨C 綱C 年C 蚤C 糊C 海苔C 鉢C 浜C

骨C 耳C 飯C 肉A 脇A 玉? 土? 年C 蚤C 糊C 海苔C 鉢C 浜C

〔四類〕臼B 鑿B 独楽C

〔五類〕牡蠣B 蜘蛛C

C群

〔一類〕柿C 蟹C 姉A 友A 藤A 誰B

〔二類〕雲丹C 門かどC 彼C 牙C 杭C 妻C 梨C 垣B

〔三類〕海女C 貝C 神C 雲C 恋C 鯛C 鞭C 頬A 亀B 蛸B 萩C

〔四類〕息C 今C 数C 絹C 杵C 管C 汁C 側C 蕎麦C 空C 種C 罪C

何C 肌C 針C 船C 麦C 藁C 跡A 糸A 稲A 海A 帯A 笠A 肩A

鳩B

〔五類〕青C 秋C 朝C 汗C 兄C 鮎C 井戸C 桶C 影C 黒C 鯉C 琴C

筋A 隅A 外A 苗A 中A 喉A 松A 味噌A 父B 鎌?

鮭C 猿C 白C 生C 葱C 春C 鮒C 蛇C 眉C 婿C 夜C 雨A 声A

足袋A 露A 鶴A 鍋A 前A 窓A 嘘B

〔三類〕毬C

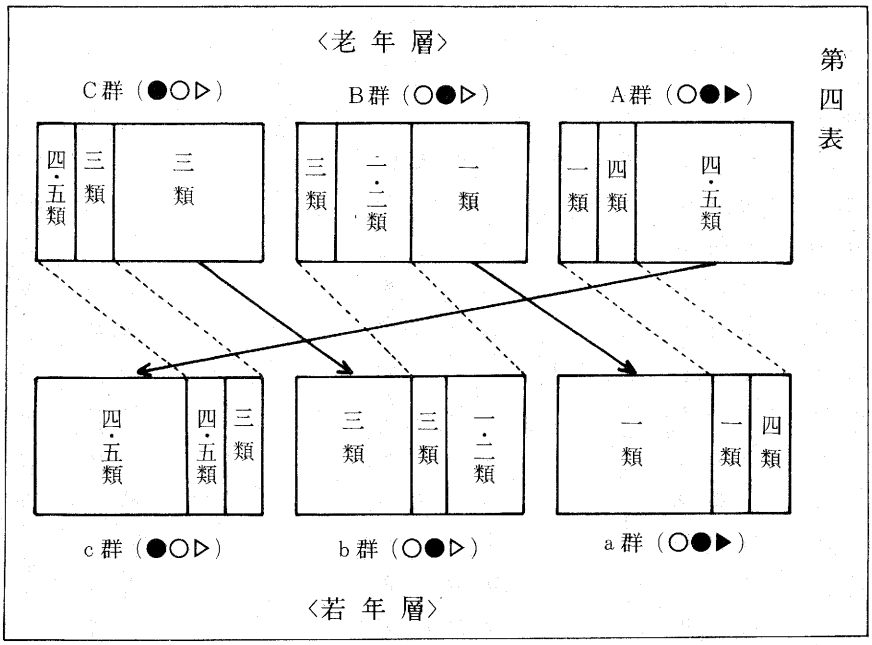
〔四類〕鞘C

?群

（不定）

第三表の　老年層と若年層の対応を略図化したものが次の第四表である。

第四表



これをみると老年層A群の四、五類のある部分が若年層のc群に対応し、老年層B群の一類のある部分が若年層のa群に対応し、老年層C群の三類のある部分が若年層のb群に対応していることが注目される。

例えば老年層のA群で若年層のc群に対応するのは、四、五類だけであり、老年層A群の一類は、そのまま若年層のa群と対応している。つまり、老年層A群の中の一類と四、五類の語を区別し、ことさら、四、五類だけを取り出して、若年層のc群と対応させている。この現象は、老年層と若年層の対応が単なる音声上の変化によるものでなく、外部のアクセントの影響によるものであることを想定させる。さらに、その影響は、二拍名詞全体の老年層から若年層へ、型と語類の対応が安定していく方向からみて、

一類	二・三類	四・五類
○●▼	○●▽	●○▽

の山口（共通語）アクセントによるものであると思われる。

以下、各語類ごとにみていきたい。

四、五類は老年層でA群、C群に分属しており、若年層ではc群にほぼ統合している。先ほど述べたように、これは、四、五類独自の動きであることから、山口（共通語）アクセントの影響による変化であると考えてみたい。とすれば、四、五類の中で老年層のC群からそのまま若年層のc群に対応している語彙は、一足先に山口（共通語）アクセントの影響を受けたものかもしれない。老年層のA群の四、五類のうち、若年層でc群に所属する語彙は、あらたに山口（共通語）アクセントの影響を受けて変化したものではないだろうか。そして老年層A群の四類で、一部、そのまま若年層のa群に属している語彙は、外部の影響に取り残された、換言すれば、見島の四、五類の伝統的な型（○●▼）を今だに保っている語と考えてみたい。ともあれ、第一表からは、五類にやや●○▽が多く、四類と違いがあるかとも思わせるが、四、五類がこうした同じ動きを示している所からみて、四、五類は合併しているとみたい。

一類は老年層でA群、B群に分かれていたものが、若年層においてa群に統合しようとする動きをみせている。これも一類の見島本来の型○●▽（老年層B群、若年層b群の型）が外部の影響で変化して、若年層のa群の型○●▼になりつつあるのであろう。

二類は、老年層のB群がほとんどそのまま、若年層のb群に対応している。これらの群の型は○●▽であり、山口（共通語）アクセントの二類の型と同じである。そのせいもあって、二類本来の型○●▽を保ったまま、変化することなく、安定したのであろう。三類は次でみるように、二類とは別の動きをしているという点からも、二類は三類とは別で、添田氏の説のように、その本来の型（○●▽）を同じくする一類と合併しているとみたい。

ここで若年層a群に所属する二類の語、6語（「蟬、北、虹、沼、人、笊」）に口をむけたい。このうち、「蟬、北、人」は共通語アクセントでも、例外的に○●▼をとる語であり、これらは個別に、共通語のアクセントを習得したように思える。

三類は老年層でB群とC群に分属していた語が若年層でb群に統合しようとしている。これも外部のアクセントの影響による変化であり、老年層のC群が示す本来の型●○▽から若年層のb群の型○●▽へと移りつつあるのであろう。

次に、若年層のc群に属す一～三類の語に注目してみたい。これら26語のうち、21語は共通語でも例外的に●○▽をとる語である。一類では「友、誰」、二類では「雲丹、門、彼、牙、杭、妻、梨」、三類では「海女、貝、神、雲、恋、鯛、鞭、頬、亀、蛸、萩、鳩」である。また、山口アクセントでも共通語の影響を受けて、例外的に●○▽化した語がいくつかあるが[8]、前述の21語の中では「友、雲丹、門、彼、牙、杭、妻、海女、貝、神、雲、恋、鯛、鞭、頬、亀、蛸、萩、鳩」の19語が該当する。これらのうち、三類の語は、本来の型●○▽をとって、そのまま、とどまったと考えられもするが、一、二類の語は、山口（共通語）アクセントの影響をうけて個別に変化したものではないだろうか。

以上、各語類の検討から、見島の二拍名詞アクセントの本来の体系は、

一・二類	三類	四・五類
○●▽	●○▽	○●▼

であったと考えたい。

ここで再び、四、五類の問題についてふれてみたい。第一表をみる限りでは四類に比べ五類に●○▽が多いようである。この場合、現象面からすると、いわゆる四、五類に区別がありそうにも見える。しかし、これは奥村三雄氏[9]、添田建治郎氏[10]も説かれる如く、四、五類所属語彙（特に五類）の認定に問題があると思われる。

五類の認定にあたっては、中古～中世前期頃の古い文献によることは困難と思われる。そこで、平曲譜本など[11]新しい資料を含めて、できるだけ文献で確認できる語彙にしぼって、五類の資料を分類しなおしてみた。

第五表

老年層　五類21語

○●▼雨　声　足袋　露　鶴　鍋　前　窓

8語　38.1％

●○▽秋　汗　鮎　桶　影　鯉　琴　猿　春

鮒　眉　婿　蜘蛛　13語　61.9％

五類を再分類してみると、第一表よりも本来の型と思われる○●▼の割合がふえてくる（23.5％から38.1％へ）。第五表を第四表の四類と比較すれば、○●▼の占める割合は、四類42.9％、五類38.1％となり、差が縮まってくる。こうしてみると、四、五類の間に積極的な差は認め難いように思われる。

さし当っては、五類語が四類語よりも早く、山口（共通語）アクセントの影響をうけたというような解釈もありそうだが、奥村氏も説かれる（筑紫国語学談話会発表での批評）如く、四、五類の区別を持つ方言に隣接しない限り、五類語が四類語と別途なアクセントをおこすというような事は考えられないように思う。

四、結び

見島の二拍名詞アクセントには、三つの型○●▼、○●▽、●○▽がある。そして、現在、山口（共通語）アクセントの影響をうけて、その体系が大きく変化しつつある。しかし、若年層を通して、アクセントをながめることにより、見島の二拍名詞アクセントの本

来の体系は、

一・二類	三類	四・五類
○●▽	●○▽	○●▼

であると思われる。

見島のアクセントの様相は複雑である。今後は、もっと長い拍の名詞や、形容詞、動詞まで調査範囲を広げ、見島のアクセントの姿を明らかにしていきたいと思う。

註

(1) 厳密には東京方言中輪系（金田一春彦『国語アクセントの史的研究』塙書房　昭49・3）。

(2) a　岡野信子「萩市見島方言の語アクセント」（『国文学研究』第6号　梅光女学院大学国語国文学会　昭45・11）、「山口県萩市見島の方言アクセント」（広島方言研究所紀要『方言研究叢書』第三巻　三弥井書店　昭49・9）

b　曽野正純「山口県萩市見島の方言アクセント」（『山口国文』第5号　山口大学文理学部国語国文学会　昭57・3）

c　添田建治郎「萩市見島の方言アクセント卑見」（『語文研究』第52・53号　九州大学国語国文学会　昭57・6）、「萩市見島の方言アクセント卑見（続）」（『山口大学文学会誌』第35巻　山口大学文学会　昭60・2）

(3) 山口県教育委員会『見島総合学術調査報告書』昭39・3

(3) 一～五類の呼称は、金田一春彦、和田実製作「国語アクセント類別語彙表」（『国語学辞典』東京堂出版　昭30・8）に従った。

(5) 倭名類聚抄、図書寮本や観智院本の類聚名義抄、大慈院本四座講式貞享版補忘記などによった。

(6) 平山輝男『全国アクセント辞典』（東京堂出版　昭35・6）での現代の東京、京都、鹿児島三地点のアクセントも参考にした。

(7) ●、○は高、低音拍を、▼、▽は助詞「が」の高、低音拍を表わすこととする。

(8) 添田建治郎「山口市内の方言アクセント――「共通語」化の側面を中心に――(一)」（『山口国文』第2号　山口大学文理学部国語国文学会　昭54・2）

(9) 奥村三雄「国語アクセント史の一問題――出雲地方のアクセントを中心に――」（『藤原与一先生古稀記念論集　方言学論叢　Ⅱ』三省堂　昭56・6）

(10) 四、五類の問題については、添田氏より口頭にて御教示賜った。詳しくは、本号、添田氏の論文を参照していただきたい。

(11) 奥村三雄『平曲譜本の研究』桜楓社　昭56・5

〔付記〕
今回の調査にあたっては、次の方々に多くの御協力を賜った。篤く感謝いたします。

浜野　竹松、東野　元一、田畑　利一、田口　昌作、船戸　正一、吉川　和男、船戸　ヨシコ、赤崎　スエ子、石戸　オキク、浜村　セキ子、田口　光男、田口　栄太郎、津田　寿一、大島　敏和、河内　光枝、大田　素子、山根　光江、田口　フジ江、山田屋　喜一郎、浜村　一夫、東野　博秋、大田　和也、長谷　道昭、中村　真知子、大島　清子、木村　英子、船戸　香代、山根さゆり、船戸　良美

（敬称略　順不同）